

第1部会

的な意味を含意していた。宗教の諸概念やそれらによって構成される概念的枠組みは、不可避免的に歴史的・文化的な偏見をもっている。それはオットーの宗教史学にも顕著に見られる。西洋モデルの宗教概念を非西洋の宗教へと直接的に適用して説明される宗教史の記述は、どうしても歴史的・文化的な偏見を含まざるをえない。したがって今日、従来の宗教史学で自明視された諸概念や諸理論も、具体的な宗教的コンテキストへ引き戻して再検討することを迫られている。その意味では、オットーの東洋への旅は、近代西洋に成立した宗教の諸概念を東洋の宗教的コンテキストの中で再考するうえで、重要な契機となる可能性を秘めていた。しかし、彼はあくまでも近代西洋の宗教概念に依拠しながら、ヒンドゥー教伝統の諸相を把握しようとした。彼の宗教史的視座はキリスト教神学者としての立場から、東洋の宗教と西洋の宗教の類似性あるいは平行性へと向けられていた。その結果、彼はインド宗教の特徴をなす「多神教」的な側面を落ちこぼしてしまうことになった。

つまり、オットー宗教史学の核心には、エリアーデなどの宗教史学にも見受けられるように、近代西洋のキリスト教的世界観の根強い影響が見てとれる。オットー宗教史学の方法論的な再検討によって明らかになるのは、従来の宗教史学の「語り」を具体的な諸宗教的コンテキストへと引き戻しながら修正しなければならぬことである。現代の宗教学において、従来の宗教史の「語り」を修正しながら、それを再記述していくという宗教解釈学的な研究は、これまで以上にますます重要になっている。

ド・ブロスにおける

宗教起源と言語起源の問題

杉本隆司

Fétichisme 概念は、フランスの啓蒙思想家シャルル・ド・ブロス（一七〇九—一七七七）により創始された。彼は『フェティッシュ諸神の崇拜』（一七六〇）で、フェティッシュを宗教の起源におき、ここから人類の宗教観念は歴史的に偶像崇拜を介して一神教（キリスト教）へと進歩したと主張した。一九世紀にこの概念はマルクスやフロイトに受け継がれ、現在の学術用語としての意味内容はこの一九世紀的文脈に規定されてきた。だがド・ブロスが生きた時代の数々の思想潮流にも深く規定された産物であったことはいうまでもない。

本報告ではその思想潮流の一つとして一八世紀に流行した言語起源論を取り上げた。ド・ブロスも『言語の機械的形成論』（一七六五）を著わした当時の思想モードの一翼を担う思想家だったからである。この書の刊行は『フェティッシュ神』の五年後であり、言語起源論への関心は宗教起源論よりも後にみえるが、実際は逆であり、彼の主題は言語起源論にあった。この報告では、彼の宗教起源論を言語起源論と突き合わせ、「フェティッシュム」概念の創始に言語起源論が担っていた影響を推察した。

まず『フェティッシュ神』の批判対象として、ド・ブロスが

「象徴的解釈」(Figurisme)と呼ぶ神話解釈から取り上げた。この解釈によれば古代民族の崇拜にユダヤ・キリスト教の唯一神や理神論的な最高存在が象徴されていたとする。これに対しド・ブロスは古代民族の崇拜は野生人と同じフェティシズムであり、唯一神ではなくこれこそが宗教の起源だと反論する。この崇拜は理念の抽象化のレベルの点で、いわゆる偶像崇拜よりも低級であり、それよりも古い崇拜である。この順序の重要性はフェティシズムとキリスト教の関係に置き換えると明白となる。神学者によれば確かにエジプト人は動物崇拜を行っていたが、その動物はあくまで真の崇拜対象(唯一神)の象徴にすぎない。キリスト教普遍史の順序では、真の崇拜対象(シニフィエ)のほうが物質対象(シニフィアン)に先行せねばならないからである。物質ではなく、はじめに言葉Ⅱ神があらねばならない(『ヨハネ福音書』)。

唯物論者ド・ブロスが批判するのは、唯一神を認識する抽象能力を要する崇拜から感覚的能力しか要しない物質的な崇拜があとから出現した、すなわちシニフィエがシニフィアンに先行したという見解である。この批判からは、唯一神へ至る神の觀念の抽象化の歴史(宗教史)を、人間の認識と言語の発展に依拠して論じる明確な態度が読み取れる。この態度はすでに『人間認識起源論』(二七四六)のコンディヤックが先鞭をつけていた。具体的個物から感官が受け取った個々の觀念の長い反省過程に由来する抽象觀念が歴史の原初から存在するはずはなく、これを論拠に両者共にデカルトの生得觀念論を否定する。個人における知識の習得過程の最終形態が抽象觀念だとする

このコンディヤックのロジックをド・ブロスの宗教史に適用すれば、人類史的な宗教進歩の最終形態は唯一神にあたり、その原初形態は具体的個物すなわちフェティシユとなる。ド・ブロスの創始したフェティシズムとは、シニフィアンとシニフィエの分裂以前の存在への崇拜であり、この点においてはじめて「神即モノ」の直接関係を開示しうる信仰形態を示すために創始された、非常に戦略的な論理仮説であった。だがシニフィアンとシニフィエが必然的に結合するような状態など想定できるだろうか? ド・ブロスが『言語形成論』で懸命に証明しようとした論点こそ、実はこの言語の恣意性の否定であったのである。その意味で『フェティシユ神』は言語起源の論理を宗教史に応用した一つの例証だったといえる。

デュルケームとモースの「隠された共同作業」 —— 供犠論の生成 ——

山崎 亮

『社会学年報』において中心的な位置を占めていた宗教研究は、周知のように、デュルケーム、ユベール、モース、エルツらの緊密な共同作業に依拠していた。デュルケームにせよモースにせよ、その宗教研究を十全に理解するためには、このような共同作業の内実、さらには社会学年報学派の宗教研究全体への目配りが欠かせないはずだが、従来の研究ではこのような視